

登録有形文化財

# 畑田家住宅活用保存会年報

No.4 / 2005



Sadao N.

## <今年の行事予定>

第6回畑田塾

3月26・27日

雨はどこからやってくる？

気象予報士

高島 誠

「ふしぎ」をみつけよう！水を吸うプラスチック

大阪大学総合学術博物館教授

江口太郎

あなたもコンピュータになろう

大阪工業大学教授

中西通雄

友だちといっしょに自分を表現しよう

LIC はびきの演劇ラボ芸術監督

八木延佳

春の一般公開とフォーラム

5月29日

「家族生活の国際化と法」—国際結婚や国際養子縁組の法律問題はどのように解決されるか—

帝塚山大学法政策学部教授・大阪大学名誉教授

松岡 博

第7回畑田塾

10月30日

セレンディピティーを知っていますか

筑波大学名誉教授・ノーベル化学賞受賞

白川 英樹

秋の一般公開とフォーラム

11月13日

「尺八談義」

都山流尺八竹琳軒・市立豊中病院長

松山 簾雨山(辰男)

## 災害対策は万全を期して早く

会長 畑田 勇

物理学者で随筆家の寺田寅彦博士は、その著書の中で「天災は忘れた頃に来る」と警告されました。しかし、最近では状況が変わり、特に本年は、台風に次ぐ地震、地震に次ぐ台風、さらには各地に大雨洪水、又、浅間山の大噴火と、全国的に地表の状態は甚だしく荒れ狂った状況にあります。

地球温暖化に伴う弊害が益々高まってきています。原因の中には、我々の日常生活そのもの、或いは、高度な消費活動が考えられ、まさに人災と言わざるを得ません。これらの人災には早く対策を立てなければ、やがては天災を呼び、我々人類が甚大な被害を受けることとなります。

古来から、日本家屋は地震に強いと言われてきました。最近では建築基準法などを設けて地震対策を強化してきました。ところが最近の大型の地震においては、むしろ基準法を守った建築物が、却って地震に弱くて大破した現状を聞くにつけて、まだまだ本当の地震対策にはなっていないのだろうかと思慮するばかりです。

周知を集めて、早急に、しかも積極的に本格的な災害対策を検討しなければならないと思います。

平成 16 年度 事業報告

### 1. 第 5 回畑田塾 2004 年 3 月 27・28 日

「お金はなぜあるのか」

大阪大学大学院国際公共政策研究科

教授 辻 正次

「古墳のはなし」

—羽曳野とその周辺の古墳を中心に—

羽曳野市教育委員会

市民大学 伊藤 聖浩

「キレイな心と脳を育てるのに、

何が大切? 食事や栄養に関する知識は必須」

大阪大学健康体育部 教授 杉田 義郎

「まんがを描いてみよう」

イラストレータ 古川 明美

### 2. 一般公開とフォーラム

#### 1) 第 9 回春の一般公開とフォーラム 5 月 30 日

「くすりとくらしを考える」

—河内は古代から薬の道であった—

大阪大学総合学術博物館 米田 該典

#### 2) 第 10 回秋の一般公開と木造建築フォーラム

11 月 14 日

「日本の古い木造建築の魅力を探る」

京都大学工学部 講師 西澤 英和

### 3. 出版

「古い日本住宅に見られる生活の工夫」

畑田家当主・大阪大学名誉教授 畑田 耕一

### 新正会員 (平成 16 年 3 月以降)

浅田宏子	牛島敏明	大脇玲子	尾野光夫
鍵谷晃司	木村-須田廣美	小林一清	佐藤さつき
中條善樹	陳 政一	辻 正次	中野萬智子
三上香子	山口博子	山本雅英	

### 新特別会員

辻 正次 杉田嘉郎 米田該典 畑田潤三

### 役員

会長：畑田勇  
副会長：甲斐学、中村貞夫  
畑田拓男  
幹事：石井智子、笠井敏光  
畑田弘美 (新役員)  
会計：畑田庸雄  
顧問：畑田耕一

## 畑田家住宅からの文化の発信—畑田塾、一般公開、フォーラム、出版—

畑田家住宅活用保存会会長 畑田勇、顧問 畑田耕一

羽曳野市は、大阪府南東部にあり、東半分は羽曳野丘陵上に位置し、応神陵古墳など古市古墳群があって、豊かな歴史と恵まれた自然を持つ人口約12万の住宅・工業都市である。

畑田家は羽曳野市の西部にある明治期の旧家の趣をよく残している庄屋屋敷である。主屋はつし2階を持つ田の字型平面に座敷がつき、土間の梁架構は古い伝統をよく伝えている。これらに2棟の蔵、長屋門、付属屋、納屋を配した屋敷構えで、平成11年登録有形文化財に登録された。

文化財に登録されたのを期に「文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もって国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献すること」という文化財保護法の目的に沿って、建物の文化財としての価値を保持しつつ、これからは新しい文化を生み出し続けるための「活用」の計画として、平成12年春より、羽曳野市と同教育委員会の支援・協力を得て「畑田塾」、一般公開ならびにフォーラムを開始した。

幸い、活動を開始して半年あまり経った頃に、趣旨に賛同して下さる多くの方々のご理解とご努力で「畑田家住宅活用保存会」(会長 畑田 勇氏、平成16年10月31日現在会員248名)を結成することができて、活動が軌道に乗った。

「畑田塾」は、江戸時代からの文化・歴史を語りかける屋敷の中で、たとえ漠然とはあっても将来のことを考えはじめた小学校高学年から中学校の生徒に、いろいろな分野の専門家との対話と学習を通して、将来の道を見つけるきっかけをつかんで貰うのが目的である。この年代の子供の教育には学校だけでなく親や保護者の作り出す環境が大変大事であることを考えて、子供と一緒に参加を奨励している。毎年3月に2日間かけて行い、本年(平成16年)で5回目になった。講演して頂いた講師は前大阪大学総長 金森順次郎、作家 筒井康隆、関西棋院 吉田美香、大阪歴史博物館長 脇田 修、武庫川女子大学教授 糸魚川直祐、東京大学教授 山本智、フォトジャーナリスト 小林正典、大阪大学文学部教授 柏木隆雄、関西二期会会員 畑田弘美ら20名になる。

子供達は、畳敷きの部屋でその道の専門家から親しくお話を聞いて、これまで知らなかった分野、考えてもみなかったことへの関心を呼び起こされる。また、こわごわ、つし二階に登ったり、床の下を走り回ったりして家の中を探検し、あちこちに無造作に置かれた昔の生活用具や、どの様に使われていたのかよくわからない中二階の小部屋などを見て、この家に暮らしてきた人々の生活様式や風習に思いを馳せ、自分達とは違う時代に生きた人々の文化を学び取っていく。専門家の話は、時には難しすぎることもあるが、小学生は話が難しくても殆ど分からなくても、それが分かるようになるまで内容を記憶しておくという能力を持っている。難しい話も無駄にはならない。

毎年5月と11月に行う一般公開とフォーラムには、50名を越える参加者がある。年齢層は広く、古い家や道具への郷愁を覚えつつ昔の文化の良さを確認しておられる方もあれば、昔の風習・生活の工夫を今の時代に生かしていこうという若い方も多い。これからもできるだけ広い層の方々にこの屋敷に接して頂き、建物の新しい魅力や個性を引出して、この畑田家住宅を美しく生かし続けることが出来ればと願っている。

一般公開の午後に行うフォーラムでは、いろいろと活発な意見交換があり、会の幕引きに困るくらいである。世界11ヶ国から70名の参加を得て開催した「世界の人々と文化を語ろう」、太陽光発電の第一人者で立命館大学副総長の浜川圭弘氏と長年5.6キロワットの太陽電池を使っている筆者の一人畑田勇の講演による、「21世紀のエネルギーを考える」、大阪大学総合学術博物館長肥塚隆氏の「アフガニスタンの美術—文明の十字路の古代と現代—」、畑田家の納屋をアトリエにして風景画の大作を描き続ける洋画家で宝塚造形芸術大学教授の中村貞夫氏による「大河を描く—風景画の軌跡—」などのフォーラムでは、講演の後参加者全員による熱のこもった議論が1時間を越えて続くのが常である。



当主の畑田耕一が行った「オルゴールを楽しむ集い」では、シリンダーオルゴールの繊細で音域の広い音色が、家中に広がり、古い木の家の良さを改めて実感させてくれた。

昨年より塾やフォーラムの内容の小冊子による出版を開始した。第一作は前記の「アフガニスタンの美術」である。

昨年より塾やフォーラムの内容の小冊子による出版を開始した。第一作は前記の「アフガニスタンの美術」である。

本稿は文化庁月報2004年10月号に掲載されたものを、文化庁の許可を得て、加筆改訂したものである。

関西二期会会員畑田弘美さんの「歌のお話」

# 登録有形文化財畑田家住宅の耐震補強工事について

京都大学工学部 菊岡喜一、西澤英和

## 1. はじめに

文化財建造物の修理は解体を伴う場合、調査に多大な時間と費用を要する事が多い。しかしながら、登録文化財等の歴史的建造物の場合には構造補強が必要にもかかわらず、費用の点から迅速な補強工事が困難な事がある。本報では、必要最低限の構造調査及び耐震診断とそれに基づく費用対効果の高い耐震補強工事を短期間で行ったケーススタディの概要について述べる。

## 2. 建築概要

畑田家住宅は大阪府羽曳野市の郡戸地区の庄屋屋敷で現在の母屋は明治20年頃の再建とされる(写真1)。切妻造葺瓦葺で、つし二階を持ち、構造は主に差鴨居だが客座敷は長押で構成されている。落間及び内蔵は曳屋である。客座敷・内蔵呂周辺・南側廊下・洋間は増築であることが現地調査及び担当の話より推測される。増築の詳細い変遷は不明だが、近年では平成5年(1993)に屋根瓦の葺替および外観の修理が行われたことが棟札から判明した。

## 3. 構造調査

基礎は版築が母屋全体に施されていたが、客座敷・内蔵は十分ではなく、ひび割れや沈下が見られた。客座敷は沈下の影響により南方向へ大きく傾斜していた。内蔵・落間の北側の柱が延石から一部迫り出していた。

軸組は仏間・客座敷の床下に根絡み・足固めがなく貫を通すのみになっていて緊結が足りず、床構造の一体化が弱かった。また柱が根継ぎされているものがほとんどで、胴付きのものも多数見られた。

屋根荷重や二階妻壁の荷重が隅に集中し、入込書院の上架材や女中部屋の桁にかかりたわみや亀裂が生じていた。小屋組は継手の加工が不十分なものや束の長さが足りず飼木を挟んでいるものが多数見られた。

客座敷の増築の際に上屋桁を途中で切って半解体して下屋を増築した結果、継手が多くなり構造的に不安定になっていた(写真2)。また客座敷が長押で構成されるために、差鴨居で構成される本建の他の部分や曳屋された内蔵との構造的な一体性を欠いていた。

## 4. 補強工事概要

柱の傾斜が著しい場合には立起しを行うのが通例だが、平成5年に屋根の修理が行われてそれほど期間が経っていないことを鑑み、土間の沈下を防ぐための基礎工事および軸組・小屋組の構造補強を主として補強工事を計画した。具体的には以下の通りである。

### ・ 基礎の地業

地業が不十分な客座敷・内蔵・落間部分の基礎の一体性を高めるためにRC基礎を打設した(図1)。北側の柱が迫り出した部分には礎石を基礎に埋め込んで、柱が延石



写真1 畑田家住宅外観



写真2 上屋桁継手

から外れないようにした。

### ・ ユカ下の補強

足固貫のみで構造的に不安定な箇所足固を設けて強化し、床下の一体性を高めた(図1、写真3)。また根継の不十分な箇所を当板・ボルトなどで補強した。

### ・ 壁の水平抵抗性能の向上

建築物について土壁及び柱の負担しうる地震力について耐震1次診断を行ったところ、1・2階共に梁間方向で想定地震荷重をやや下回る傾向が見られた。これに対する耐震補強として1階には仏間西側に設置した足固めと頭繋ぎの間に鋼板耐震補強壁を挿入した(写真4)。2階には筋違又は格子を中に組み入れて木摺を打ち土壁で塗り込めた袖壁を設置した(写真5)。

### ・ 継手の補強

木造建築では、水平抵抗が比較的大きくさらに柔構造であるため、相当な耐震性を発揮しうるとされてきたが、大きな上下動を伴う直下型地震においてはほとんど期待できないことがわかっている。特に継手が不完全な木造建築では初期の上下動で柱筋が踊り継手が外れ、直後の

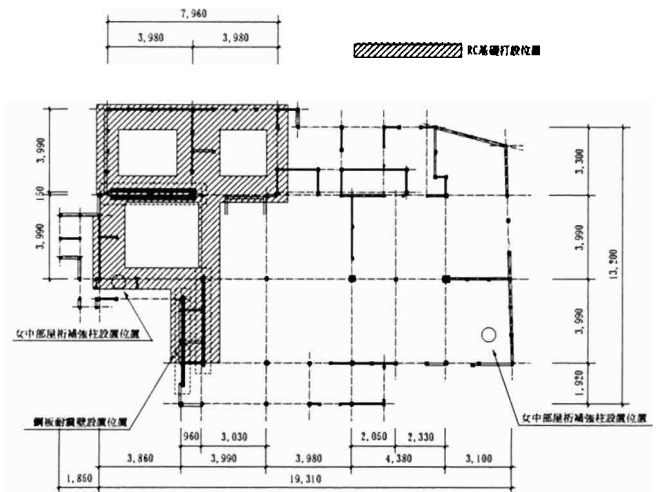


図1 一階構造補強図

大きな水平動で崩壊に至る可能性が考えられる。これを防ぐため、当板及びボルトなどで補強して軸部の一体性を高めた。

### ・ 補強柱の設置

隅の荷重によって負担がかかっている部材の下に補強

柱を設置した（写真 6）。これは応急的な処置であり、後に部材の交換等本格的な修理が行われる場合には取り外すことが可能である。

#### 5. 費用・工期

費用は構造調査研究費 42 万円、直接工事費約 430 万円（材料費込）工事監理費 75 万円、合計 548 万円であった。工期は調査期間を含めて平成 15 年 11 月 17 日から平成 16 年の 3 月 24 日までの約半年であった。左官工事は厳冬期をできるだけ避けるために基礎コンクリートの打設および養生を年内に行った。

#### 6. まとめ

登録文化財の場合、大規模な解体・調査・復元にこだわらずに必要な最小限の調査と工事を行うことで、修理費用を最小限に抑えることができる。今後、以上のような調査・工事を行う体制の確立が望まれる。

本稿は、日本建築学会 2004 年度大会学術講演梗概集に掲載されたものを、許可を得て一部改訂したものである。



写真3 客座敷足固め

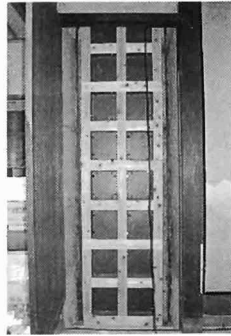


写真4 仏間押入鋼板耐震壁



写真5 二階袖壁筋違

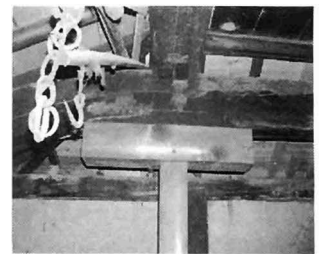


写真6 女中部屋桁補強

## 音楽空間としての畑田家住宅

関西二期会会員 畑田 弘美



畑田家住宅横の道は、小学生だった 6 年間私の通学路でした。そこには同級生の中村君が住んでいました。大きな長屋門に付いた小門を少し屈みながら出入りする姿がありました。門の向こうはどんなお住まいなのだろうと思ったものでした。それから 30 年近い歳月が経ち、その畑田家住宅で演奏させていただくという嬉しいご縁を結んでいただきました。

2003 年 3 月 30 日の「畑田塾」で、リードオルガンで「荒城の月」「花」「浜千鳥」「早春賦」などを弾き歌いし、ミュージックベルを子供たちと演奏し、最後に、歌劇「蝶々夫人」より“ある晴れた日に”を原語で独唱いたしました。このオペラアリアを気持ちよく歌い終えたときには、私の言わんとすることを聴衆の皆様は肌で感じ、聴き、体感して下さっていました。つまり音の響きに乗せた歌の心情をしっかりと受け取って下さったのです。

日頃会話を交わすときには、体全体を震わせて声を出すようなことはしません。しかし歌唱する場合は、息の流れを良くし、声帯の振動を体全体に伝えて、広い空間に声を送り出すためのエネルギーをいかに効率よく使うかを考えます。歌を歌う空間のことを考えてみますと、通常の日本家屋には音を吸収する素材が多いのに対して、ヨーロッパの建築、とりわけ教会は、天井の中心は非常に高く、大きく、石造りで、最小限の喉の負担で豊かに共鳴してくれます。ホールが豊かな音で満たされるのです。

畑田家住宅は伝統的な日本家屋です。天井は高く、100 年以上の歳月を経て固くなった大きな柱、梁や鴨居などでできた木組み、室内の広い平面と外の広いお庭など、美しい音楽を生み出す条件が揃っているのです。広い庭は歌い手が視線を遠くに向けて歌声を響かせるのに役立ちます。このような場で演奏を聴いて頂くことにより、空気の共鳴を体感し、息づかいを聴き、美しいメロディーに心が動かされるのだと思います。

最近、日常生活の中に電子音が溢れ、音のない静寂を味わう機会が少なくなりました。このような時代だからこそ「人間の声」の素晴らしさや、生演奏の音色の美しさに触れて頂く機会を作り続けていきたいと思うのです。

木は伐採した後も息づき、成長を続けるといいます。その強度が一番大きくなる年数は 200 年と聞きます。畑田家住宅を作っている木の生長もまだまだ楽しみです。ここに多くの方々が集い、その人達によってこの家が美しく生かされていくために、微力ではございますが少しでもお手伝いできればと思っております。

## 行事に参加していただいた方からの感想文

### 第5回畑田塾(2004年3月27日、28日)

栄養の話はすごく面白かったです。よくわかりました。今日はとても楽しかったです。いろいろなことがわかってよかったです。マンガをかいたりしておもしろかったです。また、来たいです。ありがとうございました。(真鍋理沙)

お天気も良く、昔の建物がよく保存されている静かな環境で楽しい一日を過ごさせて頂きました。杉田先生のお話では、日常の食生活がいかに健康な生活を送る上で大切に再確認いたしました。育ちざかりの子供がいますので、これからいっそう食べる物には気をつけようと思いました。古川先生の「マンガを描いてみよう」では、ほんとうに久しぶりに絵を描きました。子供も書きたいものを一生懸命描いていて、子供のこういう時の集中力というのはすごいなと思いました。子供にとっても貴重な体験のできた一日だったと思います。また、こういう機会があればぜひ参加させて頂きたいです。ありがとうございました。(真鍋香織、真鍋理沙さんのお母様)

今日は、普段の生活とは違った空間で、とても密度の濃い一日を過ごすことができました。冒頭に畑田先生が言われた「世界の平和のために勉強する」という言葉がとても印象的でした。杉田先生のお話は、普段から気になっていた食生活のことが次から次へと出てきて、興味深かったです。私は、菜食主義で特に最近、卵も食べなくなったので、タンパク質を何から摂ればよいかわからず、大豆製品だけで大丈夫なのだろうかと不安でした。しかし、先生の大豆と玄米(おみそ汁とごはん)が完全栄養食というお墨付きをいただき、今の食生活をさらに進めていこうと思いました。そして、油を、もっと製品を選んで摂るようにしようと思っています。家では、裏の畑で作った野菜で、季節ごとに旬の味を味わっていますが、この生活を大事に守り続けていこうと思います。「まんが教室」は当初、参加しない予定でしたが、描いてみると、我を忘れて無心に描いて、調子にのって発表までしてしまいました。私は、中村先生に絵を学ぶものですが、その御縁で今日ここに集えたことを幸せに思います。私は小さい存在ではありますが、私なりに「世界の平和のために」絵を描いていこうと思います。(画家 宮本亜紀)

昨日のお金の話と古墳の話はとてもおもしろかったです。今日の栄養の話は長くて疲れました。昼からのマンガが楽しみです。(高鷲南小 登田真里奈)

むずかしくて分らないところもあったけど、勉強になりました。ポテトチップスなどのおかしが体にとても悪いことが分ってびっくりしました。マンガは、そんなに興味がなかったけどおもしろかったです。ペンをはじめて使えてよかったです。とてもいい体験になりました。(丹比小 石田萌)

少しむずかしくて分らなかったところもあったけど、勉強になりました。ポテトチップスは体に悪いことが分ってよかったです。はじめてペンとかを使ったけど、とても楽しかったです。またやりたいです。(丹比小 畑田真莉子)

私は高校生ですが、お金の話では知らないことの方が多かったくらいです。子供たちの実演も中々面白く、お金が無い

とどうなるかが良く分かりました。古墳の話は実物を間近で見ることが出来て楽しい思いをさせて頂きました。鞆などというヘンテコな形の弓入れには興味をそそられました。健康の話は私にとって難しすぎて、途中で耳が受け付けなくなるくらいでした。でも最初のほうは覚えています。普段は50分授業ですが、面白い、興味深いことには90分でも集中できるのだなあと感じました。(大脇千恵美)

放送大学に通っている関係で、畑田先生よりこの講座のことを聞き、中学校を卒業したばかりの娘と一緒に参加させて頂きました。お金の話では、子供達が物々交換を実際に体験できたのは良かったと思います。古墳の話では、身近に歴史の宝庫のような古墳があることをあまり知らなかったので、一度全て回りたいと思います。栄養の話では、食事が健康に関係しているのがよく分かりました。ただ、子供は50分授業に慣れているので、休憩時間があれば良いかなと思います。マンガを描くでは、何を描けばいいのかわからず、ペンもこんなに使いにくいとは思いませんでした。古い民家をこのような形で活用されているのはとてもよい事だと思います。羽曳野市在住の友達を誘いましたら、次回参加したいということでした。広くて静かなお家で2日間有意義な時間を過ごすことができました。(大脇玲子、大脇千恵美さんのお母様)

話が長いなと思ったけど、学校では教えてくれないことがわかってよかった。みなさんが一生懸命やっているのがわかった。はじごのぼるのや、家の中の色んな探検ができて面白かった。きてよかったと思う。(高鷲南小 友森菜摘)

大変面白いお話ありがとうございました。人間は食物によってそれほどまでに性格が変わるのかとおどろかされました。玄米、ポテトチップス、コーラの話が印象的でした。また、後半では、マンガにはなりませんが、貴重な体験をさせて頂きました。(無記名C君)

むづかしくてよくわからなかったけど、ネコの実験の話がおもしろかったです。実際にペンを使って、マンガを書けてうれしかったです。はじめて書いたけど、なかなかうまく書けたです。楽しかったです。(無記名D君)

第2日目の午前は途中から聞いたので、分かりにくいところもあったが、だいたい分かった。午後の「マンガを書こう」の方は、資料があったので分かりやすかった。透視法がどんなのか分かった。自分で絵を書いたのが面白かった。修了証書がもらえてとても嬉しかった。1日目に行けなかったのが残念でした。(丹比小 畑田吉英)

### 春期一般公開と薬のフォーラム(2004年5月30日)

旧家の畑田家を見せていただくとともに丁寧な説明を頂き有難うございました。村長も務められた由緒あるお家柄で立派なお屋敷に感動いたしました。私も、戦争中田舎に疎開しており、足踏み式の道具でお米を搗いたり、石臼で大豆を粉にしたり、縄を織ったりした経験がありますので大変懐かしい思いをさせて頂きました。また、中村貞夫画伯が小磯良平先生のお弟子さんだということを知り、私の無くなった従姉が小磯良平先生に師事しておりましたので、不思議な縁だなと思いました。米田先生の講演も、大変面白くしかも有益

で、時の経つのも忘れて聞き入ってしまいました。先生の著書「暮らしと植物」まで頂戴し恐縮に存じます。このような得がたい貴重な機会を与えて頂きましたことに心から感謝しております。  
(京都大学名誉教授 梶 慶輔)

畑田家のフォーラムに参加させていただき有難うございました。ご出席の皆様は整然とした学びの姿勢と静かながら張り詰めた緊張感には何時もながら心引き締まる思いが致します。米田先生のフランクなお人柄と該博な薬用植物の御学識に接し、この度もまた「人と人の触れ合い」による心のつながりと学ぶことの幸せを頂戴いたしました。フォーラムの徳と存じます。正倉院の御物の中に7000余りの薬用植物が含まれ、それらの大部分について成分と構造解析が為されている事実、薬師によって献上された歴史の詳細、千有余年のあいだ生分解や酸化分解を蒙らなかつたことなど素朴な疑問や興味はつきません。米田フォーラム第二部の開催を期待しております。  
(姫路工業大学名誉教授 三軒 齊)

大和川を渡り、美原のNHKアンテナを左に見て少し東に入ると、羽曳野市郡戸に登録有形文化財畑田邸がある。かつてこの地域の庄屋として、今でも大きな敷地に昔を偲ばせる佇まいが見事に残された屋敷である。長屋門をくぐり、大きな瓦屋根の母屋に入る。当初は茅葺きの大屋根であったという。さぞかし見応えのある建築であったと思われる。昔のままの土間から高い上がり框をまたぐと、広い和室が田の字型に並んでいる。この中の二部屋と広縁が、講演会場に早変わりするのである。正面には仏間があり、その横から廊下を渡って奥座敷につづく。古い農家のつし二階は、もともと人が住むための部屋ではなく、蚕棚や農作物、柴の乾燥、農具の保管場所として利用されてきたようである。畑田邸もつし二階(屋根裏)に小さな体育館なみの空間があり、床には土が厚く敷かれている。ものの上げ下ろしは滑車を使って行う。屋根裏のこの広い空間は、風通しも良く、床土はよく乾燥している。茅葺きの屋根といい天井裏の敷き土といい、実に徹底した断熱構造を実現しているのである。

今回の催しは、大阪大学総合学術博物館の米田先生の「なにわの薬師」という講演であった。先生は、薬用植物の研究者でとくに奈良正倉院の宝物中の香木・漢方薬にご造詣が深く、香木「蘭奢侍」の話を中心に、ぎっしりと詰まった聴衆の心を長時間にもかかわらず惹きつけられた。香、香木、薬草、古代日本の地歴、海外の地理・植生等々、近代科学の分析機器を駆使したデータをもとに、まさに古今東西縦横無尽に私たちを異次元の世界へ誘って下さった。大学の講義や文化講演会などの型にはまったお話しではなく、講演者とご当主畑田氏の掛け合い(大阪弁でチャチャ入れ)がおもしろく、聴衆からの質問も飛び出すやらで、これが大阪の文化の真骨頂だと感じた次第である。  
(八尾高校 健谷徳治)

#### 秋期一般公開とフォーラム (2004年11月14日)

阪神淡路大震災で倒壊した古い住宅は、屋根瓦が重かったからと聞いて、そう信じていた。しかし、西澤先生のお話を聞いて、古い家の場合には柱の腐食、新しい家は、建て方に問題があったためと分かった。中越地震は阪神淡路大震災の2

倍の強さの揺れにもかかわらず、倒壊した住宅は非常に少なかった。これは日本の伝統的工法で作った家が地震に対して非常に強いためであることを、実際の家を使った実験結果を通して説明された。最近の日本の住宅は、屋根にベニヤ板を張り、防水用のポリマーシートを入れて瓦を乗せている。夏の高湿多湿で、10年の保証期間が過ぎた頃にはベニヤ板が腐ってしまう。また、コンクリートの基礎に柱を緊結した最近の住宅は、大きな地震には却って弱いという話も聞いた。2年前に住宅を購入し、死ぬまであまりお金をかけずに年金生活を送る予定をしていた私には衝撃だった。今の家を長持ちさせるには、自分の目でチェックし、必要に応じてリフォームすることが大事である。安心して相談できる大工さん探しから始めねばならない。  
(大阪大学専門官 矢野富美子)

日本の伝統的な木造建築では、柱が礎石に固定されず、その上に載っているだけであるが、実はこれが優れた免震性を備えていて、建物を崩壊の危機から救い、今に残る理由の一つである、という話を聞いて、だるまおとしのことが念頭に浮かんだ。これは同形の扁平円柱を数個積み重ね、最上段のだるま人形を落とさないように木槌で最下段のものを叩いて外していく玩具である。叩き方の強弱によって飛び出すか、位置をずらすかするが、それより上のは柱状の形を殆ど崩さずにその場に残る。建物の場合には柱も多く、礎石が土地に固定しているので、多方向の揺れに対する両者の関係は複雑だろうが、現代の免震工法との対比上、大変興味深い。

(澤木内科院長 澤木政光)

私たち家族は26年間(1971~1997)を畑田家住宅で過ごしました。画家の主人中村貞夫はこの家で生活が気に入り今もここで仕事をしています。私は広い家や庭の掃除が行き届かず空間の豊かさを逆に煩わしく感じるときもありました。

今回、西澤先生のお話を聞いて、壁面が少なく柱と梁で支えられている家屋のすばらしさが理解できました。時代をかけて建物を造っていく。一代目、二代目、三代目と、そしてそれが文化になっていく。土と石と木という自然のものを使って組み立て釘は最小限しか使わない。経験と勘で養われたこの伝統工法が建築基準法に従わないと知って驚きました。今の法律では一定期間で壊れるようにつくり壊しては建てる。家まで使い捨ての時代になって、昔のものはなくなり、殺風景な町並みが広がるのではないかと不安になります。  
(大阪狭山市 中村恵美子)

初めて畑田家を見学し、主屋と長屋門・蔵に囲まれた庭の日差しに時間の移ろいを感じながら西澤先生・畑田先生のお話を聞かせていただきました。古い木造建築には、気候にあった工夫や建具の開閉による自由な間取りなど現代住宅でも取り入れることの出来る要素がいくつもあると思います。私自身も住宅の設計に携わっており、実際に同様の構造補強を行うことがあり、参考にと西澤先生のお話を伺いに参りました。現代住宅のように合板や金物で強固に補強するのではなく本来の木造建築の架構がもつ柔軟な強さを取り戻すことが重要であるというお話しに、改修の時の何か可能性のヒントを感じる事が出来ました。  
(無有建築工房 松本直樹)



アメリカ・マサチューセッツ大学名誉教授で本会会員のオットー・ヴォーグル教授から畑田家住宅活用保存会の活動に対してメッセージが寄せられました。以下にヴォーグル先生の隣人シーモア 玲子さんの日本訳とともに掲載させていただきます。



Otto Vogl  
Herman F. Mark Professor Emeritus, University of Massachusetts

The Hatada Academy is one of the most unique institutions for future directions in the education in Japan. It brings together students and teachers, young and old. It provides inspiration and knowledge that is needed for their success in the 21st century. I am privileged to be associated with the Hatada family, (especially Hatada Koichi) for many years and would like to congratulate them as their skilled effort in this endeavor. Most importantly, the house where the Academy is being held is a place of tradition that has its roots in the Meiji era. The house in Habikino was built about 120 years ago by Hatada Yasugoro, the great grand father of the present Hatada, in the Meiji tradition, (Meiji 20 nén) as a farm house in Habikino (now a City of about 120,000 inhabitants) near Sakai. It has been kept over the years immaculately and unchanged by the family and has now the status of a municipal monument. Mrs. Vogl and I visited the house in Habikino a few years ago and were impressed by its charm and authenticity as a rural mansion. It is an ideal location to hold the Academy. I can speak with some authority as a connoisseur of Japanese life, teaching and the Arts and wish the Academy success and the students of the Academy success in their future lives.

畑田家住宅活用保存会は日本の教育の将来にとってもっともユニークな文化活動を展開する場を提供している。そこでは、老いも若きも学生も先生も皆が一緒に集うことができる。この文化活動を通し参加者は21世紀に成功するために必要な知識とインスピレーションを体得することができる。光栄にも私は長年にわたり畑田家、特に畑田耕一名誉教授と親交があり、このような文化活動を推進される畑田家の皆様に敬意を表するものである。さらに重要なことは、この文化活動が明治時代にさかのぼる伝統のある家で行われていることである。この家は約120年前に畑田耕一氏の曾祖父の畑田安五郎氏により堺市の近くの羽曳野市（人口12万）に明治の伝統ののっとして建てられた庄屋屋敷である。今まで畑田家の努力により昔のまま良く手入れして保存されており、今では国の登録有形文化財になっている。2, 3年前に家内と私はこの羽曳野市の家を訪れたが、本来のままの田舎の庄屋屋敷の魅力に感銘した。このような文化活動を行うには理想的な場である。日本の生活、教育、美術には多少精通している者として、私は畑田家住宅活用保存会の文化活動とその参加者が将来ともに発展することを心より祈念している。(翻訳：シーモア 玲子)

## 会計報告

### 収入の部

繰越金	156,845円 (前年度繰越金)
会費	624,000円 (312口)
寄付金	15,000円
雑収入	6,500円 (絵葉書、出版冊子)
合計	802,345円

### 支出の部

借料、損料	10,000円 (机、椅子等)
講師謝礼	250,000円 (5名)
資料作成・印刷費	174,250円 (資料、年報、出版)
通信費	65,310円 (振替手数料、郵送料)
事務費	8,137円 (事務用品)
雑費	30,170円 (講師接待、他)
繰越金	264,478円 (次年度繰越、一部積立)
合計	802,345円

## 編集後記

昨年の10月に本会名誉会員の畑田潤三氏が亡くなりました。同氏は畑田家住宅に生まれ育たれた方で、当主の耕一氏の叔父に当たられます。93年の生涯の大半を郡戸で過ごし地区の発展に貢献され、保存会の活動を陰から支えてくださいました。おだやかで、さわやかなお人柄を偲んでご冥福をお祈りいたします。

私たちの活動も5年目に入りました。皆様からいろいろな形でお力添えいただき感謝いたしております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。(S.N) (表紙カット「納屋北面の景観」 中村貞夫)

事務局 〒583-0874 大阪府羽曳野市郡戸1-1 畑田 勇 電話0729-55-4380  
会費の納入は郵便振替(口座番号00980-2-41107; 加入者名: 畑田家住宅活用保存会)へお願いします。